

じゃあね



中島啓江

KTC中央出版

じゃあね

中島啓江

◆中島啓江に関するお問い合わせ



〒151-0051

東京都渋谷区千駄ヶ谷4-15-13 シアターサイド2F

TEL: 03-3796-3300

楽工房・ホームページ <http://www.raku.co.jp>

じゃあね

初 版 1998年12月25日

著 者 中島 啓江 (なかじま けいこ)

発行人 前田哲次

発行所 K T C 中央出版

〒460-0008 名古屋市中区栄1-22-16

T E L 052 (203) 0555

〒163-0230 東京都新宿区西新宿2-6-1-30

T E L 0120-160377 (注文専用フリーダイヤル)

振替 00850-6-33318

印刷所 竹田印刷株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社までお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
価格はカバーに表示してあります。

I S B N 4-87758-123-5

© Keiko Nakajima 1998 Printed in Japan



どんなに離れていても通じあえる、
世界中でたった一人の、私のお母さんへ。

あなたがこの世に生まれ　あなたがこの世を去る
わたしがこの世に生まれ　わたしがこの世を去る
その時　涙があるか？　その時　愛があるか？
そこに幸せな別れがあるだろうか？　あるだろうか？…

私の歌「生きるものの歌」の歌い出しは、母親が生まれたばかりのわが子に、語りかけている気持ちで歌っています。

この曲のレコーディングが行われたのは、神宮の花火大会の暑い夜で、出かける前に、母はこんなことを言いました。

「今の世の中おかしいよねえ。なんで子が親を、親が子を、ののしったり、殺めたりするんだらうか？」

わかってないよ。だれでも、皆、親から命をもらったのに。

私だって、啓江の婆ちゃんから授かったんだもの。

人は皆、出逢いがあるのに、その出逢いを大切にしなさず
ざるよねえ。命を粗末にしすぎるよねえ。

この歌は、すさんだ世の中だからこそ、多くの人に聞いて
もらいたいね。今夜の花火大会みたいに、ドーンと打ち上げ
てもらいなさいよ。そして、いつまでも、心に残るように歌
つてきなさいよ。」

……あれから3年たった夏、打ち上げ花火のように母は昇
天しました。

その時、悲しみの中にいた私は、“一人では生きられない”
と思いました。

でも、世の中にはもつとつらく、悲しみにたえている人も
いるんだから、私は泣いてはいけない、元気で明るく生きな
くては！

母のいない私の新しい人生は、始まったばかり。少しでも音楽を通じてみなさんを励ますことができたら……と、そう思っています。

そんな気持ちでいっぱい私の言葉と私の心が、この本には詰まっています。

そして、あらためて、私の歌を聴きにきてください。

母の愛を一身に受けた私が、今度は皆さんに愛を捧げます。そのいちばん最初の、愛の一冊です。


98. 幸日



目 次

別れ

入院

.....

10

じゃあね

.....

28

あゆみ

誕生

.....

44

いじめ

.....

51

卒業公演

.....

68

親孝行

.....

80

ミュージカル

.....

86

『アイ・ガット・マーマン』

.....

96

母と私と音楽

.....

103

思い出

花 112

ファックス 118

衣装 124

サッカー 132

ラジオ 138

クリスマス 144

大切な人 150

2 度目の青春 157

命の話 163

夢

これから 174

Planner ····· MIKI MURANAKA
Editor in Chief ····· YUKO MURO (T-time)
Designer ····· MORIO HIROSE (T-time)
Photographer ····· MASA AKI FUJITA
Coordinator ····· TETSUYA NISHIYAMA (RAKU KOBO)
HANAE OTA (RAKU KOBO)



別
れ



入院

その朝、平成8年11月7日の午前10時ごろ、私は前日のコマーシャル撮りの仕事が終わって、空港に向かう車の中にいました。家に電話をかけたら、母は、「あ、少し寝てたの。なんか頭が痛いから」と言っていました。元気でした。

「寒かったり、ぼかぼかしてたりして、なんか氣候がよくないから、体には気をつけてね。少しあったかくなったら、あったかい格好して買い物でも行けばいいじゃない。」

実はね、戸棚にお金を入れてあるの。お父さんの背広も買っておかないと、

12月にコンサートがあるから。買っておきなね。あとはお母さんの好きなもの
買えばいいじゃない」

それが元氣な母との、最後の会話となつてしまいました。

その1時間後に救急車で運ばれたそうです。

私がそれを知らされたのは、大阪の帝国ホテルで、ディナーショーが終わって
からのことでした。

母は意識を失っていたのですが、救急車の中で、一度意識を取り戻して、
「啓江には知らせないで。仕事は何よりも大切だから。お願い」

と言ったそうです。

だから、まわりのスタッフもディナーショーが終わるまで、黙っていてくれま
した。もし、知らされていたら、きっと、最後まで歌えなかったと思います。

最終の新幹線に乗って帰ってきたら、いきなり父が土下座をして、

「おまえの大事なお母さん、こんなことになってしまつて、申しわけないと謝るんです。

父の話では、私との電話の後、

「啓江がね、お小遣い置いてつてくれたんだつて。なんか買いに行こうね」と、すぐくはしゃいでいたそうなんです。

トイレの中で倒れたらしいのですが、幸いトイレに手すりがあったので、頭を打たなかったのです。

クモ膜下出血ですから、もし頭を打っていたら、ほんと即死だったのに、とりあえずは破裂しなくて。ただ、奥すぎて手術ができない状態だったんです。

助かる確率は低かったのですが、先生の、

「このまま破裂しないで、1年もてば大丈夫かもしれない」という言葉を信じてがんばりました。

母が入院している9ヶ月間はたいへんでした。その病院は完全看護だったので、面会時間が決まっていました。午前中11時くらいから午後5時くらいまでだったかな。

でも、私が病院に行ける時間は、朝早くか、夜中。“うまいこと入れてもらおうかな”と考えたこともありましたが、他の患者さんやご家族のかたも同じような思いでいるわけですから。やっぱりそれは、きちんと守ろうと思いました。

そういう気持ちを察してくれる“白衣の天使”はいるんですね。

母がこういう状態になる前は、テレビや雑誌で、現役の看護婦さんが、

「看護婦という仕事は3Kだから」

と答えているのを見て、

“それだったら、なんで看護婦になったの？ 天使はどこへ行っちゃったの。ほんとうにたいへんなお仕事だというのはわかるけれども、どんな仕事でも、た

いへんなどころはあるでしょうに”

そう思っていました。

でも、母がクモ膜下出血で倒れ、首から下は全く動かなくなってしまったので、当然下の世話が必要なわけです。ほんとうなら娘の私がするべきところを、母は私に触れさせようとしませんです。私がしようとすると、お母さん、怒ってしまうのです。

そんな中、一生懸命看護婦さんが、私の分までめんどろを見てくださったのです。

看護婦さんに言われました。

「啓江さん、啓江さんはダメですよ。お母さん怒っちゃう。啓江さんは絶対触っちゃダメ。歌手とかね、芸術家がそういうの触っちゃいけませんって、お母さん、いつもおっしゃってますから。私たちがいるから安心して」

ほんとうに“天使はいるんだ”と思いました。私のお母さんだからっていう